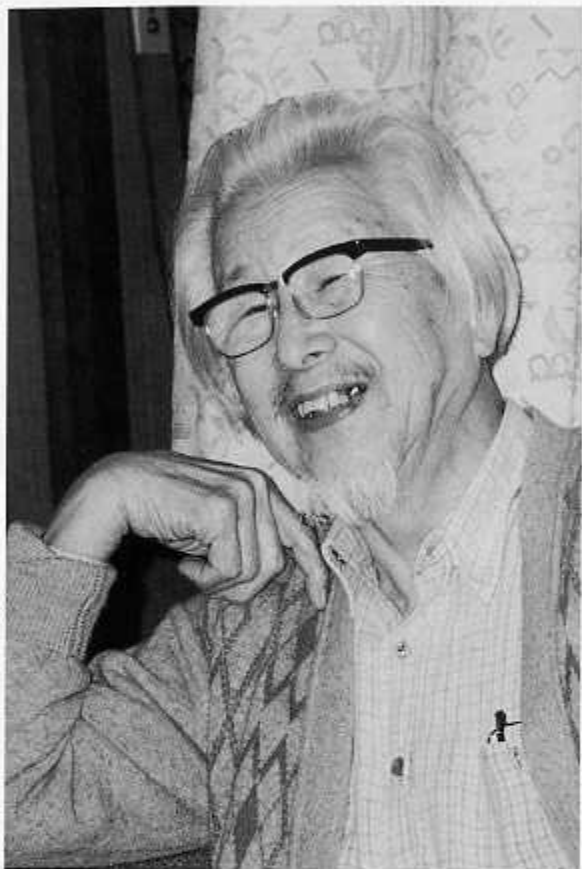


安曇野は昏れて紫

猫蓑庵 東明雅先生 追悼集

猫蓑会 編



ご自宅にて(平成8年1月)



葛三 百五十年忌正式俳譜にて執筆をつとめる(昭和42年11月)



松本市のご自宅書齋で教え子たちと(昭和54年9月)



松本市城山にてお花見(昭和28年4月)

信州大学弓道場にて(昭和34年11月)





嵯峨康隆氏・草間時彦氏とともに(平成3年7月)



軽井沢でお孫さんたちに囲まれて(平成3年8月)



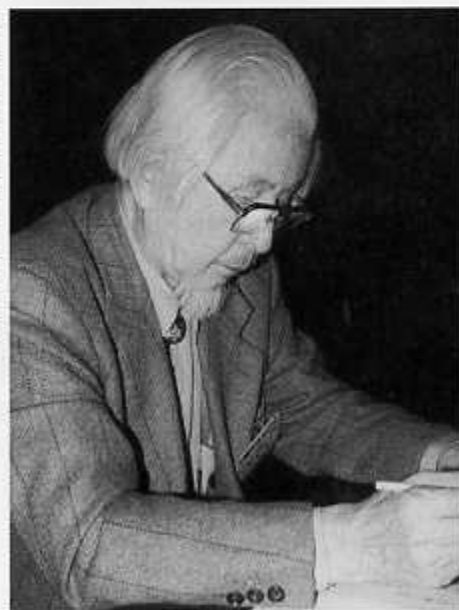
信州大学退官記念祝賀会にて(昭和55年5月)



亀戸天神藤祭奉納正式俳諧にて(平成元年4月)



お孫さんの結婚式当日、国際文化会館にて  
(平成10年4月)



国民文化祭岐阜で棚をとめる  
(平成11年10月)

写真提供…東郁子夫人

安曇野は昏れて  
紫春炬燵  
明雅

安曇野は昏れて紫春炬燵 明雅

目次

挨拶

青木 秀樹 14

「東明雅先生を偲ぶ会」要記 佛淵 健悟 16

追悼のことば

宮坂 静生 20  
二村 文人 22  
川野 蓼艸 25  
土屋 実郎 27  
磯 直道 29

大畑 健治 31  
内田 麻子 33  
鈴木千恵子 34

挨拶

東 郁子 36

追悼発句集

37

追悼連句集

1 源心 粧ほふ山 川野 蓼艸 捌 54  
2 歌仙 星走る 土屋 実郎 捌 56  
3 半歌仙 冬菊の 磯 直道 捌 58

4 茨	尽きぬ名残り	近松 寿子 捌	60
5 二十韻	そぞろ寒	小林しげと 捌	62
6 歌仙	東の籬	宮下 太郎 捌	64
7 歌仙	富士の雪	小林 静司 捌	66
8 二十韻	冬菊	本屋 良子 捌	68
9 二十韻	冬霧	内田 麻子 捌	70
10 二十韻	百代の	坂本 孝子 捌	72
11 二十韻	紅葉かつ散り	副島久美子 捌	74
12 二十韻	面影や	中田あかり 捌	76
13 二十韻	時雨	市野沢弘子 捌	78
14 二十韻	初しぐれ	上月 淳子 捌	80

15 二十韻	かじけ猫	原田 千町 捌	82
16 二十韻	小春空	豊田 好敏 捌	84
17 二十韻	温め酒	蒲原志げ子 捌	86
18 二十韻	狸毛筆	下鉢 清子 捌	88

「東明雅先生を偲ぶ会」 式次第 90

東明雅先生 略年譜 91

「東明雅先生を偲ぶ会」を終えて 94

# 「猫菴庵 東明雅先生を偲ぶ会」 ご挨拶

青木 秀樹

このたびは、急なご案内にもかかわらず「猫菴庵 東明雅先生を偲ぶ会」にこのように多数の方々にご参加いただき、ありがとうございます。

東明雅先生はかねてより病氣ご療養中のところ、去る十月二十日午前0時19分に永眠されました。二十二日の葬儀・告別式は故人のご意志により、近親の方々で執り行われました。先生の弟子である猫菴会会員の多くが葬儀への参列をご遠慮申し上げたこともあり、このようなお別れの会を催すことを奥様にお願ひし、お許しを得た次第です。

本日は、奥様をはじめご令嬢の武井雅子様、八代信子様、杉野美奈子様にご参列いただき、厚くお礼申し上げます。また、明雅先生と関わりの深い先生方にもご多用中にもかかわらず参加いただき、お礼申し上げます。

わたくしども猫菴会会員にとつて、明雅先生は連句の指導者であるとともに、心の拠り所でもありました。「ほっ、ほっ、ほっ」という独特の笑い声、「いいじゃん、いいじゃん」という励ましの言葉が、今はとても懐かしく思われます。

明雅先生が創設され、育成された猫菴会は二二年を経過し、一七〇名をこえる大所帯にな

っています。これはひとえに明雅先生のご人徳と、ご指導いただいた「明雅連句」の明解さのゆえと思ひます。先生は細かいことにはこだわらず、初心者を連句好きにさせる達人でした。明雅先生に出会い、連句を教えていただいたことはわたくしたちにとって幸運だったと思ひます。「蕉風俳諧研究者」としてまた「俳諧師」として、すぐれた業績を残された明雅先生を失ったことは、猫菴会のみならず現代の連句界にとつても大きな痛手です。

わたくしたちは明雅先生に教えていただいた、現代の「世態人情諷交詩」としての連句を、次の世代に引き継ぐ役割があります。本日をもってひとつの区切りとして、先生に御礼を申し上げますとともに、先生に喜んでいただけますよう、連句の道に精進したいと決意を新たにしております。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。



# 「東明雅先生を偲ぶ会」要記

佛淵 健悟

十一月二十四日、神田学士会館において、前月二十日にご逝去された東明雅先生を偲ぶ会が執り行われました。当日は一日太陽のぞかぬ冬空でしたが、明雅先生とご親交のあった方々、連句協会関係の方々、そして猫養会員など百二十名のご参加をいただき、気持ちのこもった会となりました。

偲ぶ会第一部「追悼会」は、定刻十二時、蒲原志げ子・佛淵健悟の司会進行で始められました。

初めに猫養会の青木秀樹会長より挨拶がありました。明雅先生は連句の指導者であると同時に心の大きな振り所でしたが、この悲しみを乗り越え、お教え頂いた「世態人情諷交詩」としての連句を、次の世代にしっかり伝えていくことをお誓いし、ご冥福をお祈りしますと述べました。

そして、奥様の東郁子様、ご長女の武井雅子様、ご次女の八代信子様、ご三女の杉野美奈子様が献花をされ、ご参加の皆様が続かれました。

杉内徒司様のご発声による献杯の後、ゲストの方々に、明雅先生の思い出などお話し頂きました。

十九歳の時から三十二年間師事されてこられた二村文人様は、決して威張ることのない、弱い人、困っている人に同情心の篤い明雅先生のやさしいお人柄についてお話しされました。「連句は風韻がなければいけない」と度々仰られたとのこと、私たちも胸に留めおきたいお言葉です。

信州大学連句会のお仲間の宮坂静生様のお手紙をやはり明雅先生の教え子でいらっしやっただ五十嵐譲介様に代読頂きました。明雅先生は思いやり深く、人間としての華やきとりりしさをもった方でしたと、切々と述べられ、感動致しました。

川野蓼艸様の、昭和五十七年、たまたまご一座された席で突然倒れられた明雅先生の心臓停止を蘇生術にて救われたお話は、何度伺ってもどきどきと、明雅先生の強運と蓼艸様のご恩を思わないわけにはいきません。

猫養会と同じく根津芦丈門下の結社である都心連句会代表の土屋実郎様には、節目毎の心温まるご交流のなつかしいエピソードを聞かせて頂きました。

連句協会会長代行の磯直道様の、明雅先生に初めてお会いした折のほがらかな笑いのこと、一度も一座出来なかったのが心残りですというお話等は胸に沁みました。

明雅先生とは『連句辞典』（東京堂出版）の共同執筆者でいらっしやっただ畑健治様から

は、辞典編集時の苦勞話、裏話を興味深く聞かせて頂きました。これからは研究・鑑賞に耐える連句作品を生みだしてゆくことが大事で、明雅先生の遺言でもあったと思うとのことのお言葉には気持ち引き締まりました。

最後に猫養会同人で、昭和五十六年四月に始まった朝日カルチャー「連句入門」の第一期生でいらした内田麻子様のお話には、信州から東京に出て来られた頃の明雅先生の情熱的なご指導が彷彿と致しました。

この後、追悼句を一部ご披露致しまして、東郁子様より本日の会へのご挨拶を頂きました。その中の「川野先生、二十年の長い間命を与えて下さいます有難うございました」のくだりには胸が熱くなりました。

明雅先生のお教えを守り、会員一同仲良く切磋琢磨しながら現代連句の発展のためにこれからも精進することを明雅先生にお誓いして、第一部追悼会を閉会致しました。

休憩が入って第二部は、十八卓に分かれての「追悼連句会」。各席には先生が長く親しまれた松本に近い山々の名前が付けられました。ゲストの方々、又猫養会の宗匠方によるお働きで、時間の許す限り、和氣藹々と連句を楽しみ、なごりを惜しまました。

連句復興に機関車のように尽力された明雅先生のご生涯を前に立ち尽くすのみですが、今は只、どうぞお安らかにお休み下さいと申し上げるばかりです。当日ご参会の方々、お気持ちを寄せて下さいました皆様方、本当に有難うございました。

---

## 追悼のことば

---

## 明雅先生へのお礼のことば

宮坂 静生

明雅先生と申しますと、いつも私の脳裏には松本元町のお宅のお庭にあった一本の紅梅が思い浮かびます。春になりますとお庭があざやかな紅に染まる。それは美しい大きな紅梅でした。先生は肥後もっこす、熊本男子でしたが、私には色あざやかな永遠なる紅梅です。

六十年安保の年、昭和三十五年三月に大学を卒業した私は四年間先生に教えていただいたばかりでなく、それから五十年の間、先生は常に温かく見つけて下さり、私の目指す大きな紅梅の木でした。私は先生から西鶴をはじめ江戸文学を教えていただきながら、中学の頃から俳句を作っておりましたので、先生を俳句の道にお誘いしたのでした。

かにかくに尼ともならず日脚伸ぶ 明雅

と作られた先生は、静生君、俳句のもとと連句だよねと、宮脇昌三先生の手引きで、昭和三十六年根津芦文翁から連句を学ぶことになりました。連句をはじめられるときに先生は、いま誰も見むきもしないことで歴史を動かすような大きなことに着目すること、それに十年黙って打ち込むことができるかどうかだよとおっしゃった。今日、日本の連句が盛んになった基には明雅先生の先見の明と半生のご努力があったことをしみじみ思い起こします。

西鶴研究に業績をあげておられた矢先、あざやかに西鶴から連句研究に入って行かれた先生の炯眼はこれもまた私には見事な紅梅と映りました。

あれは俳文学会第二十二回全国大会を信州大学で明雅先生を大会実行委員長に、私が事務局長を引き受けてやった昭和五十一年のこと。学会をやるからには、なにか一つ目玉になることが欲しいと、俳諧資料の他に芭蕉の更級紀行の文章にある立峠のありかを探索したことがありました。松本郊外の四賀村の山中を登攀しながら、ついに江戸時代の石畳の跡を発見し、毎日新聞全国版に大きく報道されました。そのときも先生は、こんな無用と思われることに力を注ぐ、そこが文学の基礎研究の大事なことなんだよとおっしゃった。

先生ほど学会や文学の世界で真実、心のやさしい、ひとに対する思いやりの深い方はなかったのではないか。暗いことや嫌なことやひとに心配をかけることを決して外にお出しにならない。世の中は愉しくなくっちゃいけない、くよくよしてはダメだよと茶目気を含んだほらかな笑いをいつもふりまかれた。

明雅先生、先生とおわかれをするときがあるとは思ってもおりませんでした。岡山大学での俳文学会のあと尾道を訪ね、市場でさしみを買い、帰りの車中で、お好きな酔心をかたむけながら食べたことがありますね。きのうのこのように愉しく思い出します。

先生は最高に心遣いの深い方でした。

美しいおくさまやすぐれたお子さま方、かわいらしいお孫さんに囲まれ、先生はいつまでも柏の地でお元気なのだ信じて、それをなによりも頼みと誇りと、最高の幸せと考えておりました。

明雅先生、先生は人間としての華やき、りりしさをお持ちの永遠に美しい紅梅です。ですから、いままで申し上げましたことはお別れのことばではなく、先生のご生涯を讃える一片のことばにし

て下さい。

明雅先生ありがとうございました。ありがとうございました。

(平成十五年十月二十二日)  
(偲ぶ会にて五十嵐譲介氏代読)

## 東明雅先生 追悼

二村 文人

富山から参りました二村でございます。私は昭和四十六年に信州大学に入りまして、翌年二年生に上がりました時に、先生に出会いました。同期に今日も来ています五十嵐譲介君、それから二年先輩に、今美濃派の道統補佐を勤めています大野鶴土さんがいまして、私は十九歳の春から三十一年間教えて頂きました。その間先生のお人柄というのはまったく変わるところがなかったと思います。私が印象に残っていますのは、私もたまたま教壇に立っていますので、先生から教わったことはお手本にしているつもりなんですけれども、いつも心がけていることが三つございます。それは全て先生のお人柄から示唆を受けたことなのでございますが、一つは決して威張らないこと。先生は当時は西鶴研究で全国的に知られた方でしたけれども、自分がそういう研究者として權威であるというそぶりをお見せになることは一度もありませんでした。私たちは教え子ですからいろいろお手伝いをしてほしいのですけれども、何か物を運ばせるとか、コピー一枚取らされるということさえ私

たちにはありませんでした。何でもご自分でなさっていたように思います。

二つ目は大変潔い方だったと思います。いつもきちんと自分の身を処していらっしやって、例えば学生時代にコンパの席でもですね、もう程のよいところになると、「じゃばくはこれで」とさつと席を立たれます。私たちは「先生もうちょつといらして下さいよ」という気持ちなんですけれども、すつと先生は立って行かれます。私もだんだん年を重ねてきますと、なかなかそういうことが出来なくて、ついずるずると居座ってしまうことがあるんですけども、やはり心がけたいことだと思います。

それからもう一つ、先生は弱っている人、困っている人にいつもやさしくして下さったように思います。五十嵐君が、名前をあげて恐縮なんです、卒業がなかなか進まなくて苦しんでいた時に、先に立って、やさしく励ましていらっしやいましたし、大野先輩が高等学校の先生をやめて連句一本で立つと言われた時にも、誰よりも心配していらしたのが明雅先生でした。

それから私が富山へ参りまして、井波町で全国連句大会を開くということになりました時にも、先生が、その頃まだお元気でした秋元正江さん始め猫養の方大勢にお声をかけて富山へ来て下さいました。その時にも、「何でもするから声かけてくれ」というお手紙を頂きました。一人で北陸へ行つて大変心細い思いをしていた私は、本当に元気づけて頂いた気が致します。

先ほど徒司さんがおっしゃいましたけれども、連句が今のように盛んな時に入っていたらなくて、誰も顧みる人もいない、それこそ連句が弱っていた時に、敢然とこの世界に入っていたらしたという、いつもそういう、弱っている人、もの、そういうところにやさしい目を注いで下

さったように思います。

私自身が心にとめていきますのは、これは最後に富山にいらした時、平成十二年に又井波で連句大会があつて、来て下さった時に、私が富山から拙い運転でお連れしたのですけれども、その時車中でいつになく先生は饒舌にお話になつて、「君、連句には風韻がなければいけないだよ」と繰り返し強い調子でおっしゃいました。芭蕉が最晩年に到達した境地はかるみと言われていますけれども、私は先生が最後に到達された境地は風韻という言葉で表される連句ではないかと思ひます。まだまだ私はその境地には到達出来ませんけれども、そのことを心がけて行きたいと思ひます。さつき申し上げましたように、かつて東先生は西鶴研究者としてよく知られた方でした。小学館の日本古典文学全集というシリーズに先生の西鶴研究の注釈が入つていますけれども、その月報に、先生の又先生に当たる方に守髓憲治という国文学の大家がいらつしやいましたが、その守髓先生が、去年亡くなりました。暉峻康隆さんと東先生のことを書いていらつしやいます。「暉峻君と東君」という文章なんですけれども、これは私は守髓憲治さんがお書きになつた中で最も素晴らしい文章だと思つてるんですけれども、暉峻先生の華やかな活躍を紹介なさるのと並んで、「東君は学生時代はむしろ引つ込み思案の人だつたと思う」という書き出しで東先生のことを書いていらつしやいます。こつこつと西鶴の語彙カードを取つていてということを紹介なさつて、むしろ普通に読むと地味な印象を受けるんですけれども、お二人を紹介した文章を読みながら、私は東明雅の教え子であつて本当によかつたといつも思つております。どれほど後を継ぐことが出来るか分かりませんが、皆さんと力を合わせて連句を勉強していきたいと思ひます。どうも失礼致しました。

## あ、明雅先生

川野 蓼艸

川野蓼艸でございます。私は昭和五十七年に明雅門下に居候の様な形で入門いたしました。忘れもしないのは六月に入つてでしたか、句会の中で、突然に明雅先生が意識を失つて倒れた事です。

私は偶然その様子を見ていました。駆け寄ると先生は「どうしたんだろうなあ、どうしたんだろうなあ」と仰せになつてそのまま横に崩れる様に倒れました。

脈拍はなく、胸に耳を当てても心臓の鼓動は聞こえませんでした。私は医者ですから直ちに先生の上に馬乗りになり心臓マッサージと人工呼吸をいたしました。これは皆様もぜひ覚えて貰いたいです。自分の体重を乗せて、一分間に五・六十回程度、ちょうど心臓が打つくらいの間隔で押しします。胸骨と背骨の間に心臓は挟まっておりますから、この作業で心臓は全身に血液を送り、血圧もゼロだったのが百二・三十にはなるんです。

次に人工呼吸です。氣道を確保するため、顎を前に突き出す格好にします。それで自分の唇で相

手の唇をふさぐ形にしてフツと息を吹いてやります。そんなにフーとやる必要はありません。本当は二人でやれば片方は心臓マッサージ、片方は人工呼吸とやれるんですが、その場合、殆どが女性でしたからお願いする訳にはいきませんでした。かといって男性に頼むのもおかしいもので、私は一人で二つの役をやりました。こんな時は四・五回マッサージをし、一回人工呼吸をやればいいんです。

救急車が来る間の時間を、如何に長きものとかは知りませんでした。先生は日本医大に運ばれました。先生の病名は一過性脳虚血発作でした。一過性というのはすぐに過ぎ去るという意味ですが、先生は十二時間も意識がなかったのですから、今でも不思議です。

翌朝早く、秋元正江さんから、先生はお元気で、やあと手を振られたと聞いて私はびっくりいたしました。何か後遺症が残ると思っていたので嘘ではないかとすら思いました。

その日は全国のお弟子さんから感謝の電話が鳴り通しました。私は始めて日本の連句界の危機を救ったのだという思いがしみじみいたしました。(拍手)

以後、私は先生のもとで研鑽を積み、よそでは何かというと、式目先生と呼ばれる様になりました。これは虎の威を借る狐でして、こいつの後ろには明雅先生が控えておられるのだぞ、という事だったと思います。

私は分らぬ事があるとよく先生に電話いたしました。すぐお答え戴ける事もありました。それはちょっと難問ですね、調べて明日お電話します、とおっしゃる時は私の質問が余程高度だったんだ、と勝手に思つて人に自慢いたしました。(笑)

私が今連句界で珍重されている事があると仮定するならば、勿論そんな事がある訳ではありませんが、それは専ら明雅先生の傘の下、先生の影の中にいるだけの事で、何の自慢になる事ではありません。

私は先生にどれだけ感謝してもし過ぎるという事はありません。先生、どうか安らかにお眠り下さい。私共がそちらに行つたなら連句を巻きましょう。その時は先生どうか捌いて下さい。最後に悼句。

今日よりは粧ほふ山に棲み給ふ

## 酒品芳醇

土屋 実郎

ご紹介にあずかりました土屋でございます。私共は師、清水瓢左を通して明雅先生とご交誼をいただくようになりました。この両先生の先生が芦丈先生ですから、芦丈先生を介してのお仲間ということになります。都心連句会が誕生しましたのが昭和三十四年、信大連句会の発足が昭和三十六年ですから、四十年以上のおつきあいということになります。私が明雅先生にお会いしたのは第一回の大山の正式俳諧の折、昭和五十六年の頃と存じます。当時は私が都心に入会して二、三年のほんの駆け出しの頃ですから警咳に接するところまでは行けなかつたと存じます。親しく接しさせて

いただいたのは平成元年の第一回の全国連句新庄大会の時と思います。この時は明雅先生の捌きの座に加えさせて頂き、先生の「熱燗を一杯やる」という短句に、「弁護料慰謝料よりも高くつき」という句を出しましたところ、「ウンウン」「そういうこともあるか、ハッハッハ」と採っていた。いたことをよく覚えて居ります。その後は、柚平先生、則子さん、私、静司さんの襲名披露の折、大山や青時雨忌の折にはご出席を賜り、また猫養会のイベントにはお招きをいただき、いろいろとお目をかけて下さいました。最近のことでは、芦丈先生の三十三回忌を行うに当り、静司さんと二人で先生のお宅に伺ったことがあります。平成十一年のことと存じます。さて実務の打ち合わせが終って、お酒ということになりました。このときには式田和子さんも同席しておられました。静司さんは車の運転があり、私は一杯で真っ赤になり、過ぎると眠くなる方なので適当なところで「もう充分です」などと言っているうちに式田さんとサシの献酬が始まりました。そのピッチの早いこと、たちまち一升はあけ、奥様に催促をされる。おそらく在庫を一扫して、奥様はお酒の買い足しに行かれたのではないでしょうか。しかも、お二人は悠然、泰然、陶然として盃を交して居られる。誠に佳い眺めで、酒席の品位かくありたしと敬服し、下戸としては羨ましくも思った次第でした。で、ともかくお暇いそということ、式田さんをご自宅まで送ることになりました。自宅の前の生け垣に寄りかかった式田さんが、「さようなら」と手を振って居られたことも、今は懐しい思い出です。拙いおしゃべりでございましたが、明雅先生のご交誼に感謝し、芦丈先生の門下につながる者として、猫養会の皆様とも交流を深めつつ、連句の道に精進したいと思つて居る次第です。

## 明雅先生の朗らかな笑い

磯 直道

只今ご紹介にあずかりました磯直道でございます。もう今までいろいろな方のお話に出ておりますように、今日のような連句の復興に対しまして、東明雅先生を中心とする猫養の皆様のご尽力を非常に尊敬しております。今、ご紹介にありましたように上田溪水会長の代わりに先ず偲ぶ言葉を申し上げますが、先ずその一言に尽きるのではないかと思います。もつともつとご丈夫で協会のためにもアイデアをお出し頂きましたかと思う次第でございます。しかし明雅先生はご存じのようにいろいろな名著を残しておられます。この名著は永遠のものでございまして、これから又生まれてくる人たちもこれをたよりにして、連句というものの本質を味わって、益々連句の輪を広げていくのではなからうかと期待しておりますし、その通りになるかと思ひます。くだいようですが先生が早くおなくなりになりましたこと、誠に残念だと思ひます。

次に今度は会長代行ではなくて、私個人の明雅先生を偲ぶ言葉を一言申し上げたいと思つております。明雅先生は朗らかな笑いの持ち主でした。それが第一印象としてずつとありました。それは教壇に立つ、あるいは後進を育成するといった点では必須条件でございます。あの朗らかな笑い、最初私はお会いた時に少し緊張しておりましたが、お目にかかってまったくホッとして全てお話し出来ると思ひました。それ以来付き合い合いかご指導あずかっているのでございます。二つだけその明雅先生の朗らかな笑いで思ひ出しますのは、一つは先ほど二村先生が仰つた井波で、国民文

化祭があった時に、たしか明雅先生と宮下太郎さんと三人同室だったと思いますが、我々揃きということで、明雅先生が、どんな発句を用意されましたかと、ご下問がありまして、私、羽田から飛行機に乗った時に、恐らくあの時期だとすると日本列島を日本海に向かつていくのはさぞ鮮やかな紅葉があるんじゃないかなと、紅葉の句を考えていったのですが、ところがあの時は時期が早かったんでしょいか、グリーンが濃くて紅葉のかけらというのはポツポツくらいでした。それで実は私こういったことで紅葉のことを考えていましたけれどもダメでした、明日までに何とかせにやなりませんと言ったら、大きな明朗な笑いで、それは困りましたねとおっしゃいました。そこで一晩同室させて頂いたこと、今でも目に浮かびます。

それからもう一つは、私教職を退きました時に、気障にも、平仮名で「はいかいし」という名刺を作りまして、それで全国大会だったでしょうか、明雅先生にお目にかかった時に、「先生、私も先生と同じように現職退きまして、こんな名刺を作りました」と差し上げたら、これ又愉快な笑いで、「君すごいね、こういう名刺は」ということで又朗らかな笑いを頂きました。目をつぶるとその時の先生の笑顔とあの笑い声というのがですね、ずーっとこう思い出すんでいます。

私一つ残念でございますのは、明雅先生の席で、明雅先生の揃きの席です、そういったような教え、一遍チャンスがあればと思っていたんですが、ついになうことが出来ませんでした。猫蓑の方々とはいろんなところでご一緒しておりますが、その明雅先生の揃きの席の経験がないというのは心残りでございます。ともかくも又、猫蓑の方々といろいろな思い出を通して、先生のお教えということをお聞かせ頂きたいなと思っております。甚だ簡単ではございますが、先生を偲ぶ言葉と致します。

葉と致します。

## 『連句辞典』編集の思い出

大畑 健治

大畑でございます。私は表舞台からは遠ざかっておりますので、ほとんど顔をご存じない人が多いかと思えます。連句協会の前身であります連句懇話会が出来ましたのは連句復興から十一年後のことで、そして、連句懇話会が出来ますと、新しく連句を始める方がぞくぞくと参加して参られました。その人たちのためにも、何か解説書を出さなければいけないというので、ある日、東先生から新宿の京王ビルの二階に喫茶店がございまして、来てくれないうので出かけました。丁度先程お話をされました杉内徒司さんも来ておられまして、そして、東京堂から『連句辞典』というのを出したいんだけれども、協力して貰いたい、それからもう一つは若手の研究者六、七名集めて貰えないかというような話がありました。但し、当時まだ連句が復興したばかりでございまして、連句を研究する若手研究者もいないという状態でした。それで東京大学の森川昭先生にご相談して、何とか六、七名の頭数を揃えまして、そして辞典編集に取りかかったわけでございますけれども、今申しました状況で辞典の作業を進めるどころか、むしろその、編集を手伝って頂く若手の人たちの中には連句をほとんど知らないような人もおられたのですが、先ず、連句とはどういうものか、



そこから始まったんですね。それで、この学士会館の裏の方にございます東京堂出版の会議室、そこに皆月一回集まりました、東先生にいろんな質問をするんですね、辞典を作る人たちが。それで、それが何ヶ月も続くわけです。でとうとう東先生がですね、世態人情お篤い方でいらしゃいますから、「君たちはいつまでもこういうことをやるのかね。東京堂出版ではこんな、皆さんが集まる度にけんばうらのこんな素晴らしいカットとかいるなものを用意して下さって、それでみんながこうして勉強しておられると、私は申し訳なくて仕様がなない」、そういうようなお話をされました。

それでもうこれはそんなにゆっくりと準備もしておられませんか、それで本文を解説する班、それから古典的な資料を調査する班、それから先行研究論文を集める班と、この三つに分けてまして、そして先ず本文の方はここにおられます二村さん、それから今お出になってませんが、三浦隆さん、それを東明雅先生と杉内さんに目を通して頂いて、その上で全体のバランスを計って頂いたという、そういうような次第でございました。

ただ、そのような点で不備な点もございましたので、東先生、私にですね、七人若手を集めるから、研究会を始めなさい、辞典出版後、連句を理論化するその勉強を始めなさいというわけで、先生の命名で「七騎の会」というものを作って頂きました。その中で私も研究していたのですけれども、途中私ちよつと休ませて頂いて、その間数年空白になったんですが、再度私が出られるようになりました時は、一人欠員が生じまして六人になり、「七騎の会」は無理だということで、「連の会」と名前を改めさせて頂きまして、連句の理論化ということを進めさせて頂きました。

東先生も常々、連句がしっかり評釈出来なければいけないということを抑えまして、評釈・研

究・鑑賞、こういうようなことがしっかりと出来なければ連句は滅んでしまう、つまり、研究者もしっかりと研究出来るような作品を作らなければいけないんだ、というようなことを仰っておられました。それは「ねこみの通信」の一番最後に書いておられたことと思います。それが先生の一番大きな遺言ではないかというように、私は考えております。

## ACC「連句教室」一期生として

内田 麻子

猫蓑の内田麻子でございます。偉い先生方の後にまかり出まして誠に恐縮なのでございますが、昭和五十六年の四月、新宿の朝日カルチャーで連句教室が初めて開かれました時に、第一期生として先生のお教えを受けまして、それからもう二十二年経っておりますから、その頃のことを思い出すと、昔のことというように感じでございますが、その頃先生はまだ、前年に松本から柏の方へお越しになって、その次のもう四月に朝日カルチャーで教室を開かれたわけです。それで信大時代にいろいろ培っておられたことを、今度は東京新宿の朝日カルチャーの教室で、これから皆に教えて広めていこうという、非常に先生自体がもう情熱を持って生徒に接して下さいました。そういう時に、第一期生として、生徒になったということは私の人生でも本当に幸運なことだったと思っております。当時三十人にはいかなない位の人が集まっておりまして、大体俳句の方なんかが多かったと

思いますが、そのうちずっと続いて来たのは半数ぐらいでありまして、只今は故人になられた方も多く、数えるほどしか一期生は残っておりません。私も生き残りの枯蟻螂みたいな存在だと思っておりますが、でも始まりのその先生の非常に情熱を持って向かって下さった意気込みと心意気にいつまでも打たれて、これからもずっと、出来る限りその気持ちをもって続けて行きたいと思えます。幸いに朝日カルチャー教室には次々と先生の志を継いで、先生の教えを広めて行く講師の方々が出来て、現在もそして明日もこの道の指導を続けられてゆく事を天上の師と共に心から喜びたいと思えます。

## 関口芭蕉庵時代のことなど

鈴木 千恵子

私が明雅先生と出会うことができたご縁については、以前「ねこみの通信」に書かせていただきました。それは信州大の先生の教え子でいらした二村文人さんが、東京で私の先輩であったため、昭和の終わりの頃から関口連句教室に通うこととなりました。

関口芭蕉庵は庭は広いのですが、座は小さく、毎月二卓でたいいどちらかが明雅先生捌きでした。庵は開放的で、猫養会を守るように座にはよく猫が遊びにきていました。また夏は蚊が多く、秋元正江さんと私が刺されやすい体質なのかよくメンソレータムを塗りながら巻いておりました。

その関口での忘れられない付けは今宮水壺さん捌きで、私が「男の名呼びまちがへる閨の内」というあまり丈高くない恋句をつくったときのことです。

俺のことかと首を出す犬 明雅

他にいい付けもあつたのですが、先生の俳諧味のある句に連衆は大笑いとなり、この句が治定されたのです。

もう一つ私事ですが、最近四十を前にしての頃のことだと思ひ出に残っていることがあります。明雅先生が『連句辞典』の扉に「四十ぢや四十ぢやと／今朝まで思うた／三十九ぢやもの／花ぢやもの」と都都逸を書いてくださったのです。太宰治という作家は、私だけのために特別に作品を書いていると読者に思わせる作家だったと言われていますが……。私は先生に特別に可愛がっていたのだと：先生は皆に思わせる方だったと思えます。そういうお人柄で、そういう心遣いをされた方だったと思えます。

先生が亡くなられて、本当に寂しいです。私は若輩者ですが、年が少なめということ、さらに若い者に連句を伝えていく機会が多いとすれば、先生の教えを伝え続けていきたいです。それが自分に課せられた生き方のように思っています。

## 挨拶

東 郁子

本日は、夫明雅を偲ぶ会を催していただき、このように大勢の方にご参会いただきまして、まことに有難うございました。「やあやあ皆さんしばらく……」と主人は笑顔で皆さんに呼びかけ喜んでいらっしゃるようでございます。

今後とも猫養会のみずすの発展を主人と共に祈り申し上げます。

川野先生、二十年の長い命をお与え下さいます有難うございました。

本日は娘たちまでお招きいただきまして、心に残る良い思い出を作っていただきましたことを、娘たちと共に厚く御礼申し上げます。

有難うございました。

## 追悼発句集

鶴一羽真青の空へ消えゆけり  
儂さやひとつになれる鴛鴦の水脈

東 郁子  
武井 雅子

ご来賓・追悼発句拝受

冬菊の薫りて雲を逝かしむる

磯 直道

巨星消えて涙のとめどなき秋思

伊藤 白雲

嘯みしめる遺訓尊し秋の夜

内田 素舟

先生を乗せたる鶴の渡り来よ

大野 鶴士

又一人鬼籍に入るか初しぐれ

大畑 健治

寸のびず八つ手の花よ明雅なし

國島 十雨

鳩一羽鳴くにつけてもそぞろ寒

小林しげと

一時代築きし城の翁草

俳諧師去りし枯野に道もなし

小林 静司

木の葉散る恩師の庭の猫だまり

近藤 蕉肝

冬の日も夏の日もまた師なりけり

添田 善雄

明雅師に尽きぬ名残よ紅葉散る

丹下 博之

大樹影濃し稲妻の残像に

近松 寿子

明雅大人花野浄土に遊ぶかな

土屋 実郎

露時雨袖持ち咽ぶ師の遠く

福田 眞久

花守よ十月櫻墾道に

三浦 隆

東の籬の白菊よく薫る

宮坂 静生

初冬の空にはばたく音満てり

宮下 太郎  
宮脇 真彦

初時雨にほひゆかしき白椿

山中 狐太

猫養会会員

錦秋の大なる山暮れにけり

青木 秀樹

佇ち尽くしゐる今生の時雨かな

佛淵 健悟

亡きひとにことばあふれて冬銀河

秋元 正江

秋深し熊本人東明雅逝き給ふ

鈴木春山洞

蒼茫に道ひとすぢや石露の花

穴澤 篤子

頂きし手紙の嵩や星冴ゆる

内田 麻子

百代の過客や今し鶴渡る

坂本 孝子

「夏の日」を讀返す日々置炬燵

杉内 徒司

はいはいと出句催促ぬくめ酒

副島久美子

冬芽はや大樹を守り色づきぬ

中田あかり

つらねうたの思ひ出いくつ鶴渡る

市野沢弘子

遠き日の講議忍ぶや秋悲し

山口みづゑ

石露咲きてしみて思へり俱会一処

高瀬 美保

初しぐれ石の蛙もともに哭け

上月 淳子

哀しみの芯までしみる時雨かな

原田 千町

いつしかの便り探せばずくの啼く

中川 哲

仰ぎ見し道の標や冬柏

山崎 一恵

狸毛筆小春の卓に均しけり

下鉢 清子

仰ぎ見し松在らばこそ蔦紅葉

梅田 利子

去りませし面影しのび秋深む

下坂 元子

冬銀河ひときは光る星ありぬ

中村 ふみ

天空へさやかに揺るる冬椿

八角 澄子

師の声と振りむけばただ秋の風

金久保淑子

お別れの朝に冬菊活けにけり

木屋 良子

ありし日の句座の思い出紅葉散る

若松 香

杯に映して酌まむ冬紅葉

豊田 好敏

師のご恩戒め想ふ霜夜かな

篠原 達子

ゆきたまふ時雨るる中の旅支度

蒲原志げ子

師の悠と紫雲に乗りて月の宮

桑原 美津

追悼の連句静かに時雨空

加藤 治子

名残雲神去月となりにけり

橘 朱鷺子

安曇野の風に抱かるる冬衣

鈴木美奈子

大き手の肩たたきたる小春かな

式田 恭子

枝振を残し名の木の散りにけり

近藤 守男

まなうらに仕種の在す時雨哉

加藤 亀女

冬銀河ほら先生のにこり顔

諏訪 欣二

翁忌の翁慕ひて逝き給ふ

倉本 路子

身のうちを木の葉散りぬる散りやまず

小出きよみ

漕ぎ去りし船の跡追ふ冬の海

峯田 政志

逝きたまふ二十一世紀の時雨かな

矢崎 藍

秋明菊不肖な弟子は立往生

根津 芙紗

色変えぬ松に御遺徳偲ぶらん

小野 シズ

木枯の轟と胸中吹き抜けし

加藤 慶二

引く波の俄かに早し秋の暮

長崎 和代

秋霖に寄るべき大樹失ひぬ

本田 弥生

大花野涯に灯のあり瞬けり

岩垂 景翠

筑摩の地よすがとなりぬ冬霞

田村 満子

日を重ね追慕つのるや冬珊瑚

村田 富美

しぐるるや温容ひとむねのうち

百武 冬乃

魂に伏す猫洞猫に雪風巻く

杉山 壽子

偲ぶ日や微笑かける炬燵猫

北村 良輔

大いなる夢遂げられて月へ旅

久保田庸子

水鶏塚へお供せし日の枳殻乃実

武村 利子

御夢に芭蕉の雨を聴かるるや

浅賀 丁那

寂光の木の葉しぐれを発ち給ふ

八代 嫺

歩まれし風雅の道よ冬麗

鈴木 茂

残菊の人生満尾寝顔かな

吉田 憲助

冷めきらぬ温石ひとつ抱きにけり

山口 美恵

冬ざれや師の名筆を偲ぶらん

佐古 英子

先生は千の風です小春です

松本 碧

白髯の温顔浮ぶ今年酒

繁原 敏女

残されし庵の小蓑や冬柏

吉村 美みこ

丹精の菊苑残す翁かな

高橋 豊美

ダンディーな師の後ろでや冬ぬくし

五味 蓉子

旅人の笠も軽かれ散紅葉

椿 紀子

雁や師の言たたむ諧諷詩

権頭 和弥

凍月や肥後もっこすと交はす杯

中川 凡

銀の薄ひとすじ径のありにけり

山田 歌子

愴々や猫の旅装に肥後しぐれ

登坂かりん

たましひのやう冬牡丹掌のなかに

遠藤 央子

大落暉そと猫うち猫冬に入る

海野 海砂

咲きそむる石路もにじみし別れかな

島村 曉巳

主なき髭そり置かれ冬の朝

佐々木有子

明雅忌や連句の道のうすあかり

緒方 健

師の杖のかるきほとりや神渡

中野 昌子

旅立ちの蓑のしづくや千鳥啼く

筒井 紅舟

逝きし日のまなざし濡らすしぐれかな

青木 泉子

蓑着けし猫の影かや霧流る

吉池 保男

霜柱倒れんとして輝けり

和田 順子

猫の目に涙今宵は星降らん

古賀 一郎

御旅のいづく辺りや片時雨

秋山志世子

逝きたまふ人の息吹きか萩の風

八木 聖子

秋惜しむ羽音残して鳥立ちぬ

稲垣 渥子

悠悠と逝く人ありて初時雨

柿本 時代

露滋き晨なりけり雅鳳逝く

木村 真呂



長月の芭蕉に会ひにゆく旅か

紺野千寿子

秋雨や恩師のお声偲ばるる

川津 錦子

突然の無常の風や秋別れ

宮川 侑子

おもかげはいつも笑顔や実千両

染谷佳之子

ご再考願へませぬか冬の旅

大島 洋子

笠に着た大樹たおれて草紅葉

上島登志彦

見上げれば紅葉の光の空の青

田中 寿美

初時雨笠も小蓑もなかりけり

西脇 智子

時雨るるや猫蓑庵は戸を閉ざす

長谷川芳子

小短冊うながす手振り冬ぬくし

二村 文人

背表紙に面影重ね冬の宵

山田美代子

師の示す道は直なり秋の果

井上 蘭石

時雨山人入りし俣暮れにけり

生田目常義

時雨るるや重ね硯の蓋きしむ

鈴木千恵子

師に給びし批評を束ね秋さびし

間 佐紀子

月光の耿耿としてあまねしや

宮内 志乃

寒月よ師の逝く道を照らせかし

井上 鶴鳴

師の影のとぶが如くに冬の空

中川真紀子

されど秋雅の夢へ発たれしも

川名 将義

逝きし師の声耳にあり片時雨

山本 要子

先生の御足を濯げ雪女

池田やすこ

師逝き給ひことに激しき秋の雨

難波さえこ

沈む陽を追ひて枯野に惑ひをり

伊勢本如代

底籠るかなしみの日や石露を挿す

中森美保子

逝く秋やかるみを猫の髯の先

青島ゆみを

初時雨大きな蓑の背遠く

松原 弘子

ハンサムな冬將軍である今年

伴野 末季

落葉ふみステッキ小脇に師は逝かん

花巻 珠枝

面影の恩師に月の冴ゆるかな

関口 靖子

大鷹を胸に見送る訣れかな

小池 啓子

彼の岸の句座賑やかに爛熱く

須賀 敬子

此の冬は空に珠玉のことばかな

中林 あや

夢の世の枝折を辿る時雨かな

鈴木 了齋

磯鳴のしきりに鳴ける別れかな

棚町 未悠

留守電のお声優しき夜長かな

若林 文伸

白象に白髯ゆれて秋の行く

梅田 實

面影に秋明菊の白さかな

松島 芳子

時雨るるや先師の笑顔見えがくれ

荒川 有史

尊像をかほりにこめて姫椿

林 鐵男

簀措きて影立去るや露しぐれ

水谷 紀明

柿落葉葉床しき十七季

横山 わこ

残る虫声つまりては声しぼる

大矢 房子

悲報聞く異国の窓の月に暈

根津 忠史

山脈に沈む日拝む秋の果

山寺たつみ

秋の灯にゆるりと開く十七季

西田 一枝

小六月師の文字滲む文眺む

小野 芳梅

そぞろ寒女狐どのの泪かな

伊藤 良重

木守や薫陶受けし越中路

吉藤 一郎

闇照らす灯台無人野紺菊

佐々木 洋

着ぶくれて日出づる方を拜しけり

山田 華蔵

雲井の雁恩師ゆるりと立ち給ふ

竹内たつ子

色葉散る音もゆかしき人情味

林 壤

面影はこみあげるもの鶴わたる

五十嵐譲介

(こ来賓は五十音順、会員は名簿順)

追悼連句集

源心

粧ほふ山

川野 蓼 捌

今日よりは粧ほふ山に棲み給ふ  
群を離れて飛び立てる雁

川野 蓼 捌  
東 郁子

こぼれたる月のかけらを拾ひゐて

鈴木 了齋

ジグソーパズル洋風の城

近藤 守男

湯上りのオーデコロンウの香り来る

倉本 路子

浴衣姿に垂るる黒髪

繁原 敏女

さりげなく抱だけばすると消えにけり

路面電車の軋む音する

路 男

自衛隊行くのそれとも行かないの

我を一瞥巡回の猫

路 男

中華街手品の様に麵延ばし

齋 路

当歳の子に綿菓子を買ふ

郁 男

マラソンの給水点の花吹雪

同 男

ナオ

蚕飼の村に絹の雨降る

蝶々に夢を託して放ちやる

路 敏

粥が炊けたと婆さんの声

齋 敏

碧い目の住み込み習ふ漆塗

郁 男

採算取れぬ道果つる町

齋 男

振り向けば人に言へない事ばかり

同 齋

マツチ擦るなり待つだけの恋

同 齋

教会の奥よりキリエ・エレイソン

同 齋

板前出でて仰ぐ冬月

同 齋

誰やらが我そしるらし耳かゆし

同 齋

ナウ

パレスチナにて銃を買ひけり

同 齋

僧形のトランプ囲む居酒屋に

同 齋

水平線に春の白船

同 齋

咲き満ちて花は万朶にしんかんと

同 齋

旅の土産に包む陽炎

同 齋

歌仙

星走る

土屋実郎

星走る新酒は遂に間に合わず  
 月影照らすあるじなき門  
 ほうずきの人形作り教えいて  
 その質問はとてもびつたり  
 回覧板印の朱色も冬ぬくく  
 卵雑炊原稿も出来  
 気配りの女将こまやか老舗宿  
 浮気な亭主鏡よく見る  
 フェラーリで送ってくれる筈でした  
 プレネー越えてスペインの街  
 教会の鐘で帰るよ豚羊  
 開拓農家二代目となり  
 パソコンで市場調査の月涼し  
 あんみつ食べてほぐすストレス  
 鉄兜友と被ったこともあり  
 ハナハトマメかサイタサイタか

土屋 実郎  
 二村 文人  
 山崎 一恵  
 八角 澄子  
 百武 冬乃  
 武井 雅子

人 乃 雅 惠 人 乃 澄 惠

春の湖さざ波きらと小舟ゆく  
 十三詣智恵貫い来る  
 初虹に準備万端教授会  
 予算のパイの切り様もなし  
 われながら惚れるカラオケ風呂の中  
 楊貴妃よりも白き柔肌  
 空港で恋を譲るも男伊達  
 娘が選ぶ父に似ぬ人  
 目も口も閉じて海鼠は海の底  
 サッカーリーグ順位混乱  
 山鉾について廻って疲れ果て  
 携帯灰皿またも取り出し  
 月昇る明神岳の頂に  
 しめじ岩茸音もなく伸び  
 逆境は人を鍛えて秋深む  
 電動ベッド傾斜ほどよく  
 バーのママ百二歳まで続けいて  
 艶句さらさら水茎の跡  
 夢に花その面影を胸にとめ  
 雄弁はよし蜂の一刺し

同 澄 乃 雅 澄 乃 雅 乃 惠 乃 雅 澄 乃 雅 乃 惠 乃 雅 澄 乃 雅 澄 乃 雅

半歌仙

冬、菊の

磯 直道 捌

冬菊の薫りて雲を逝かしむる

磯 直道

出会いの幸を想う凍月

高瀬 美保

久方に古書肆の街を經めぐりて

木村 真呂

大学生の歩幅大きく

関口 靖子

子供らはバイリンガルに育ちゆき

武村 利子

天道虫もしばし貢献

荒川 有史

冷酒干し明雅先生につこりと

道

累々語彙のカード積まれし

呂

こんな人だったと判る退職後

保

金髪茶髪ピアスお好み

史

いざやいざ落穂拾いついろは唄

利

見渡すかぎりコスモスの丘

靖

月仰ぐモンマントルの屋根裏に

呂

携帯電話地球飛び交い

史

復活も消え去るもあり総選挙

保

春の風邪気味ティッシュかたわら

靖

花吹雪浴びる贅沢願いおり

利

おぼろおぼろに無可有の郷

呂